

「蕎麦民話」江戸ソバリエ朗読館

～ 民話「蕎麦の茎はなぜ赤い」の東漸説 ～

ほしひかる

(江戸ソバリエ協会 認定委員長)

☆【朝鮮半島 ⇒ 対馬 ⇒ 鳥栖 ⇒ 佐賀県内 ⇒ 】

蕎麦に興味をもつようになってから、25～30年以上も経つが、その間にちらほらと「蕎麦の民話」を見聞きすることがあった。

その初めは蕎麦の歴史民話であった。たとえば、比叡山の「親鸞、蕎麦喰い木像」、九品院の「蕎麦喰い地蔵」、慈眼院の「お蕎麦の稻荷」、金蔵寺の「蕎麦閻魔」などであった。だから、後に江戸ソバリエ認定事業を始めてから、自分で描いた金蔵寺の絵を表紙にしてサービス品のメモ帖を作ったり、「お蕎麦の稻荷」の台本を書いて落語家の三遊亭円窓師匠に口演してもらったり、あるいは九品院では蕎麦奉納会を行ったりした。



〔蕎麦喰い地蔵〕



〔お蕎麦の稻荷〕
(ほしひかる絵)



〔蕎麦閻魔・メモ帖〕

そんなころ、帰郷したおりに佐賀国際空港の土産売場に『佐賀の昔ばなし』という小さな絵本が置いてあったのを見つけて買ったことがあった。今から20年ぐらい前のことだった。そのなかに「山姥と蕎麦の根の話」(鳥栖市)が紹介してあった。

内容はこうであった。

～ 留守番をしていた三人の子の家に「お母さんだよ。いま帰ったから戸を開けておくれ」と人喰い山姥が入ってきた。そして末っ子は山姥に食べわれてしまった。上の子二人は必死で木の上に逃げ、そこから金の鎖につかまって天に登って行った。すると山姥も真似て登ってきた。だが、つかまったのが腐れた綱だったので地上の蕎麦畑へ真逆さま。そのときから蕎麦の茎は山姥の血で赤く染まってしまった。～



〔佐賀の昔ばなし〕

それからしばらくして、佐賀県内に(1)この鳥栖の民話にそっくりの話が(2)神崎郡三瀬村と、(3)伊万里市二里町にもあることをたまたま知ったので、それらを参考にしてある誌に掌小説を書いたことがあった。 [佐賀の昔話 \(tosyo-saga.jp\)](http://tosyo-saga.jp)

このとき、私は「佐賀県内に同様の話が三つある」ということだけでは済まされないような何かひっかかるものを感じた。それは何かというと、佐賀県人にしか分からない感覚かもしれないが、実は鳥栖市は佐賀県ではあるが佐賀ではないところがある。どういうことかというと、今の鳥栖市は江戸時代の対馬藩の飛地だった。だから同じ県であっても藩文化が少し違うのであるが、このことは地方出身の方ならご理解できると思う。だから鳥栖は佐賀人にとってちょっと異文化的なところがあったのである。

それだったら、この民話の源は対馬にあるのではないか、というわけで対馬を調べてみると、対馬峰町に「天から金の鎖」という話があった。やはり「対馬は古代史の宝庫」といわれるだけのことはあった。

そこで私は、この民話は【対馬 ⇒ 飛び地鳥栖 ⇒ 佐賀県内】と広がったものではないだろうかという仮説をもつにいたった。

しかも、対馬というと朝鮮半島に近い。となるとこの話はどうも朝鮮から伝来しているのではないかと思いはじめた、その矢先だった。

ある日、ソバリエの小林尚人氏から朝鮮民話「お日さまとお月さま」(忠清南道)のコピーを頂いた。

読むと、その朝鮮民話は対馬・鳥栖・佐賀民話の構造とまったく同じだった。ただし日本民話の主演は山姥、朝鮮民話では虎であり、また日本民話は蕎麦の茎が赤くなり、朝鮮民話ではホーキモロコシが赤くなるのであった。さらに調べてみると、朝鮮半島にはあと二つ似た話(江原道・慶尚北道)があった。それによって、この民話が半島に密着していることが分かった。

とすると、【朝鮮半島 ⇒ 対馬 ⇒ 鳥栖 ⇒ 佐賀県内 ⇒ 】という路が想定されることになる。

その前に、話の構造が同じだからといって、同等扱いは早計だと思われるだろうから、ご説明する。

虎の話はアジアの国々でよく語られており、とくに朝鮮では山の神の使い、化身と考えられ、`恐怖、と`信仰、の二面性をもって語られているという。

二面性というのは、虎は人も食うが、一方ではホーキモロコシを赤く染めている。つまりはホーキモロコシを育てているというわけである。

一方の日本には虎は棲息していない。代わって山姥が山の神として登場する。この山姥もまた子供を食い殺す面と育てる面の二面性をもっている。

山姥に育てられた足柄山の金太郎の昔話や、子供を食う鬼子母神が子育ての神様として信仰されているのもこの二面性のためである。ただ山姥は人間化した話になっているから理解しがたいが、野獣は子育てのために餌として人や他の動物を襲う、という事実から見れば不思議ではないということになる。

余談だが、東洋の鬼子母神は仏陀から与えられた柘榴をもっているが、西洋の聖母もまた柘榴をもっている(ポッティチェリ画「柘榴の聖母」)。柘榴という共通点からすると、女性が復活再生の象徴という認識を共有しているからなのだろうか。



【雑司ヶ谷鬼子母神絵馬・ポッティチェリ「柘榴の聖母」】

マ、とにかく、そんなことから朝鮮民話と日本民話は同類だというわけである。

(さらに調べてみると、中国河南省に「狼のお婆さん」という民話があった。ただしこの中国民話の構造は中韓日と共通しているが、話の趣旨と結末は韓日民話のホーキモロコシや蕎麦が赤くなるというものではなく、子供たちが協力して狼に立ち向かうというものである。また中国民話では北は狼、南は虎が登場することを参考のために付記しておく。)

☆「蕎麦民話」地図

さて、納得していただいたところで、「蕎麦探偵」を自認する私は、この「赤い茎」民話に関心を持ち、さらに全国を調べてみることにした。

最初はただやみくもに集めていたが、この方法だと偶然性が結果を左右することになる。もちろんそれはそれで採集しておくが、新たに一つの出版社のシリーズ物で調査することにした。そこで大手の本屋さんを見てみると、たいていの本屋さんは未来社の『日本の民話』シリーズを販売していたし、また近所の図書館にもその全79巻が並んでいた。それと念のためと思って別の図書館に偕成社の『ふるさとの民話』シリーズ全48巻があったので、シリーズ物としては両社の物を観ることにした。ところが編集方針からかだろうか、未来社のシリーズでは「赤い茎」が12話も見られたが、偕成社シリーズには「赤い茎」はなく、一般的な蕎麦民話だけが数話見られただけであった。

当然、調査中に見つけた「蕎麦の茎はなぜ赤い」以外の蕎麦民話も採集することにした。その結果、下のような都道府県別【蕎麦民話】一覧表を作成することができた。

1.赤い蕎麦民話の欄は、上記の「蕎麦の茎はなぜ赤い」と同じ民話が伝わっている地区。(下段の日本地図では赤○)

2.他の蕎麦民話の欄は、上記の「蕎麦の茎はなぜ赤い」以外の民話が伝わっている地区。(下段の日本地図では青○)

なお、※☆*印は別途説明する。

都道府県別【蕎麦民話】一覧表

地区	赤い蕎麦民話	他の蕎麦民話	年越蕎麦の風習
中国		○○	
韓国	※※※		
長崎県(対馬)	○		
佐賀県	○○○	◎	・
福岡県	○		
熊本県	○	◎○	
大分県	○		・
宮崎県	○	○	・
鹿児島県			・
山口県	○○	○	
広島県		*	・
岡山県	○	○	・
愛媛県	○		
徳島県	○○	○	
香川県			・
島根県		◎	・
鳥取県		*	・
兵庫県			
奈良県	○		
京都府		*	
岐阜県			・
富山県		○	
静岡県		○	
山梨県	○		
新潟県	○		
東京都		☆☆☆☆	・
神奈川県		○	
埼玉県		○	
千葉県	○		
茨城県		○○	
福島県	○	○	
日本計	19話	22話	
宇野千代の童話	○		
石井桃子の童話	○		
伊藤充子の童話		○	
こわせたまみの童話		○	

上のように、【蕎麦民話】は日本の25都道府県で見られ、西は対馬から東は福島・新潟県に及んでいた。内訳は九州6県、四国2県、山陽3県、山陰2県、関西1府1県、北陸1県、東海1県、甲信越2県、関東1都4県、東北1県であった。

採集した【蕎麦民話】は41話であった。その内容を見て次のように四分類してみた。



- 第一室 山姥伝説、または栽培蕎麦の時代
- 第二室 聖人伝説、または宗教の時代
- 第三室 蕎麦屋の時代
- 第四室 その他

第一室 山姥伝説、または栽培蕎麦の時代

41話中19話の、約半数ちかく(46%)が山姥伝説「蕎麦の茎はなぜ赤い」が占めていた。蕎麦の一般的な姿は、白い花、緑の葉、黒い実、赤い茎である。

花の白さは中国・韓国・日本で詩や小説などで描かれてきた。また蕎麦の実の黒さはアンデルセンが「雷に打たれたからだ」という童話にしている。

蕎麦の茎の赤みはポリフェノールの一種のアントシアニンの色である。そのことが民話になっているのだが、生み出したのは虎や山姥を恐れ信仰する焼畑の民であろう。かれらが考えた焼畑農法は、縄文から江戸時代まで続いていたが、明治から段々消滅し、今はほとんど見られない。ただ、かつて対馬に行ったとき、「最近、昔の焼畑農法で蕎麦を栽培している」と聞いたり、東京でも焼畑産の蕎麦を頂く機会はないでもない。



【焼畑蕎麦搔き
:一東庵】

また対馬では「焼畑のことを木庭(コバ)という」と聞かされた。木場という地名は佐賀の伊万里にもあるので、そんな話を江戸ソバリエの寺方蕎麦研究会でも報告したことがあった。他に鳥栖市の隣の神崎辺りでは焼畑を「切野」という。関西では「切畑」というらしいから、それに繋がる言葉であろうか。

そこで、「焼畑」の言葉について調べてみると、九州(佐賀、長崎、熊本、鹿児島など)では「木場・古場 コバ」と呼び、関西(大坂、京都、和歌山、三重など)では「切畑」、関東では「狩野・鹿野など」、中部(富山、岐阜)では「夏焼」とも呼んでいたため、今でも地名として遺っているらしい。本州の「切畑」「狩野」「夏焼」などは現在の日本語として意味が通じるが、九州

の「コバ」とは何という意味だろうか？ 課題である。

もちろん焼畑農法は、中国大陸や朝鮮半島にもある。焼畑を「火田」といい、「畑」の字の語源となっている。そしてその民は「火田民」と呼ばれている。だから、焼畑も民話「なぜ赤い」も、朝鮮半島から対馬→北部九州へと伝わって来たと思うのは筋が通っていると思う。それがずっと語り継がれているのは、その地区で蕎麦栽培が続けられいたからであろう。

いずれにしる、山姥伝説は焼畑の民の特有のものであり、焼畑の民は**移動**するというのは民俗学会では定説となっている。

そのうえで、日本地図に**赤○**を入れてみると、九州・瀬戸内地方一帯に遺っているのが目につく。そこで思い出すのが、「年越蕎麦の風習」が遺っていた地域が西高東低だったことである。

[ほしエッセイ XIII\(年越し蕎麦\) \(edosobalier-kyokai.jp\)](http://edosobalier-kyokai.jp)

併せてみると、【邪馬台国東漸】という古代史の説と【栽培蕎麦の東漸】が重なって見えてくるのである。

第二室 聖人伝説(*), または寺方蕎麦の時代

第一室のような山姥の赤い茎ではない、もう一つの赤い茎の民話がある。それが広島県と鳥取県の「蕎麦の茎はなぜ赤い」という民話であるが、山姥の代わりに弘法大師が登場する。

大師が川を渡ろうとするが水が冷たい。そこにいた“小麦さん”に向こう岸へ連れて行って頼むが断られる。今度は“蕎麦さん”に頼む。かれは「いいですよ」と引き受けてくれて、大師をおぶって冷たい水の中を渡ってくれた。そのため“蕎麦さん”の脚は真っ赤になった。弘法大師は「御礼に、厳しい寒さに遭わないように冬になる前に実が成熟するようにしましょう」と言ってくれた。

もう一つは蕎麦喰い木像が親鸞の修行を助けてくれた、という話である。

いずれも、聖人が主役であって**聖人の法力**を説明する民話になっている。ただなぜ蕎麦が話材になったかということ、そこから**寺社と蕎麦が深い関係にあったことがうかがえるのである**。

第三室 蕎麦屋の時代(☆)

慈眼院の「お蕎麦の稻荷」、九品院の「蕎麦喰い地蔵」、金蔵寺の「蕎麦閻魔」、そして狸橋の狸蕎麦などの民話である。話はみな同じである。狐、お地蔵さん、閻魔さま、狸が人間に化けて蕎麦屋に蕎麦を食べに来た。客が帰った後、頂いお金を見てみると木の葉だったというお話である。

第一室、第二室とちがって舞台は**江戸の蕎麦屋**である。これは蕎麦屋という商売が初めて江戸で始まったから生まれた民話である。

ここでまた思いあたるのが、前述の「年越蕎麦の風習」の結果である。

[ほしエッセイ XIII\(年越し蕎麦\) \(edosobalier-kyokai.jp\)](http://edosobalier-kyokai.jp)

その風習は、地方と都会は文化がちがうというものであったが、**具体的には地方の年越蕎麦は「自宅で手打ち」するのに対し、東京の年越風習は「蕎麦屋の蕎麦を出前で頼む」という形であった。**

つまりは、年越蕎麦の風習も、蕎麦民話も、地方の家庭蕎麦と江戸の蕎麦屋の蕎麦のちがいが出ているわけである。

したがって、民話や風習の真の読解は、江戸蕎麦を理解している江戸ソバリエならではの眼が必要であると思う。

第四室 その他

その他の室には、いろんな話がある。そのなかで、佐賀・熊本・島根に、蕎麦の大喰いの民話(◎)がある。蛇が草を食べてから大きい動物を飲み込んでいるのを見て、蕎麦を腹一杯食べたい男が真似てその草を食べたら、自分の身体が溶けてなくなってしまったという話である。どこかで聞いた話だと思いだらう。そう、この民話が元になり、大正のころ大阪で「蛇含草」、昭和のころ東京で「そば清」という落語になったのである。

だから「その話は落語にあるじゃないか」ではない、「その落語はもともと民話にあるよ」なのである。少し前、テレビで「落語に学ぶ江戸の暮らし」という番組をやっていたが、勘違いしてはいけない。実生活からヒントを得て模倣してお笑いができるのである。

そして上の民話の真意はお笑いではない。山や周りにはたくさんの草が生えている。そのなかで蛇が喰っている草だからといって安心するな、人間が食べると死ぬぞという教えなのである

最後に、作家が蕎麦の童話を書いているのをご紹介したい。

宇野千代『赤い蕎麦』、石井桃子『おそばのくきはなぜあかい』、伊藤充子『てんぐのそばや 本日開店』、こわせたまみ作 いもとようこ絵『そばのはな さいたひ』などである。

宇野、石井、伊藤の童話は民話を参考にして作られているが、こわせの童話は創作である。しかも環境問題を取り入れた名作だったので、何冊も買って、近所の若い家族に差し上げた。そんなことをソバリエの仲間に話したら、「私も、買って子供に聞かせています」という若いママさんがおられた。さすがはソバリエさんである。

☆おわりに

民話・昔話・童話などを見ているときに、米、稲、小麦、そうめん、うどんの話も目に入った。ところが、それらはみんな漢字か、ひらがなで書いてある。だというのに、蕎麦だけは「ソバ」とカタカナで表記してあることが多かった。たとえば「ソバでも打つか」とか「ソバを食うか」といった具合である。

なぜ蕎麦だけカタカナだろう？ コメ、イネ、ムギ、うどん、ソーメンもカタカナ表記だったら理屈は分かるが・・・。

ひとつ考えられるのは、「そうめん」「うどん」は4字3字だから読んでいて判断できるけど2字の「そば」は、「側」のことかと思ったりして、なかなか意味が通用しないからだろうか。しかし一般的に外来語以外、日本語はカタカナを名詞にすることはない。「ピアノを弾く」

はいけど、「ゴハンを食べる」はない。やはり「ご飯を食べる」である。だから「ソバを食う」は国語としては問題なのである。「蕎麦」という漢字が難しいという話もある。



【不思議な麺屋】

だったら「蕎麦」と書いてふりがなを付けた方が勉強になるのになんて思いながら、ある街を歩いていたらさらに困惑することに遭遇してしまった。

〔中華蕎麦〕という看板のラーメン屋があった。「小麦粉を原料とするラーメン屋が蕎麦=buckwheat の字で表記しているのである。明らかに文字違反である。驚きながら、思わず交通違反の現場写真を撮るような気持ちで看板をスマホに収めた。

蕎麦の「蕎」という漢字の由来は、約 75 日ぐらいで早く成長するから「喬 夕ヅ」という字に草冠をのせて、考案された buckwheat のための字である。逆にいえば「蕎」の字には buckwheat 以外の意味はない。だから小麦麺に使用するのは違反である。

このように漢字の由来は、その意味を理解するためにもおもしろいと思う。いっそのことそれを童話にしようかと思ったりしたが、もう少しちゃんとしたお話になれば、上の蕎麦民話とともに江戸ソバリエ朗読会でも企画しよう。

字の神様「きみは背丈が伸びるのがはやいね。名前は何て言うの」

名ナシくん「まだ人間に認められていないから、名前はないんだよ。」

字の神様「それは寂しいね。よし、じゃあ、君は背丈が伸びるのが早いから、今日から喬(夕ヅ)くんと呼ぶことにするよ。どうかな」

名ナシくん「うん。でも字の上の方が軽そうだな、ぼくは実が育つと頭の方が重くなるよ。」

漢字の神様「そうか、分かった。じゃ、頭に草冠を載せてのせて蕎と書いてそばというのはどうだい」

蕎麦くん「神様ありがとう。蕎の字を大切にするよ」

以上